

# 富山高校物語Ⅷ 生涯の心と感性を育てる 伝統ある校訓・校歌・百周年記念歌

本校の校訓と校歌は、本校が再出発した昭和28年に定められています。

## 選びとられた校訓 「慎重 自ら持し 敢為 事に当たる」(「慎重敢為」)

本校の校訓が定まる過程から、多くの先人の思いを知ることができます。

明治33年(1900年)は、本校が**太郎丸校舎**に移転した年です。この年の生徒心得に5箇条が定められ、その中に、「**慎重自ら持し**」の言葉が見えます。

大正4年(1915年)に、「**敢為事に当たる**」を加え、「慎重自ら持し 敢為事に当たる」が校訓となりました。その後、昭和7年(1932年)に、「**協同 人と和す**」を加え、昭和12年(1937年)には「慎重 敢為 協同」となっています。

SCHOOL MOTTO  
To be deliberate in counsel,  
prompt in action

校訓が、大きな転機を迎えたのが、第二次世界大戦中の昭和18年(1943年)です。戦争遂行のため、「至誠尽忠 敬神崇祖」など五項目とされましたが、昭和20年(1945年)終戦とともに廃され、戦後の混乱期には、校訓のない状態が続きました。

昭和28年(1953年)、校名が富山南部高等学校から、富山高等学校に復した時に、校章・校歌・校旗・制服などとともに、校訓として「慎重 自ら持し 敢為 事に当たる」が、改めて選びとられました。

「慎重 自ら持し」とは、**思慮深く考察し、自らゆるぐことなく、**

「敢為 事に当たる」とは、**困難に、強い意志で取り組むことと言えます。**

静から動に展開し、熟慮し機を見た上で決意と実行を迫る、**優れた行動指針**です。

この教えを胸に、在校生や多くの卒業生は、国内外で活躍しています。

## 格調高く、詩情豊かな校歌 (一つの解釈)

本校校歌は格調高く、詩情豊かで、メッセージに満ちています。作詞の**大島文雄氏**は、本校の同窓生で歌人、文学研究者で、富山大学教授でした。作詞にあたっては、全身全霊を傾けたと聞きます。作曲の**山田耕筰氏**が、大島文雄の詞は、ありきたりでなく「品格のある校歌だ」と語ったという逸話が残っています。長年愛唱され、多様な受け取り方がありますが、一つの解釈をご披露します。

**一題目は、立山連峰の夜明けの光を、青春の夜明けになぞらえています。**

稜線の雪が朝陽に輝く光、清らかな光が額に差す。この地で送る若き日の夢と祈り。それをよすがとして、かけがえない青春期を花開き輝かそうと呼びかけています。

**二題目は、富山の海山がもつ力を、内なる意志と生命になぞらえています。**

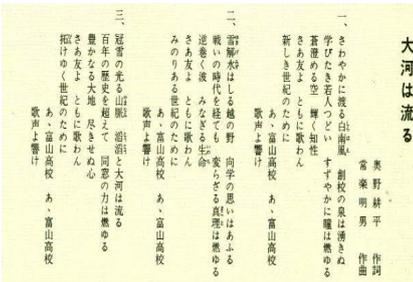
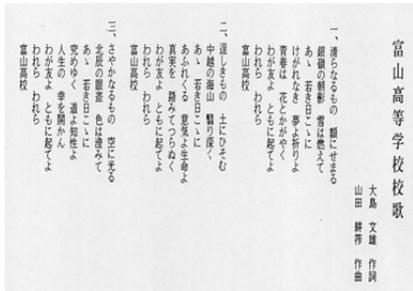
富山の自然は逞しい力に溢れ、生命の陰影が深いものです。この地で送る若き日々、内から溢れる意気や生命力をもって、真実の道を歩んでいこうと呼びかけています。

**三題目は、北極星の光を、人生の指針になぞらえています。**

北極星は絶対的な位置から、澄んだ眼差しで人々の心を見通かのようなのです。カントの言葉「天上の星の輝きと、我が心の中の道徳律」を連想させ、絶対的な存在を指針として、道理と知性を究め、人生をともに開こうと呼びかけています。

本校校歌は、歌う者に、**風土に託した普遍的な指針**を示しているように思います。多くの関係者がその思いを受けとめ、人生に生かし、これからも歌い継いでいくでしょう。

なお、本校校歌の素晴らしさに感動した方々が多く、大島文雄氏は依頼に応じて、県内で百校を越える校歌の作詞をなさいました。



## 新世紀を拓く思いに満ちた創校百周年記念賛歌「大河は流る」

百周年を迎えるに当たり、百周年記念賛歌「大河は流る」が作られました。生き生きとさわやかで、富山の春の天地を背景に新世紀を拓く思いに満ちた曲です。生徒や同窓生からも親しみまれ、折り折りに歌われる名曲です。